

語形変化が語義変化をもたらすケースについて

- 意味の転換・縮小例を中心に -

権景愛(韓国外大)

1. はじめに

「かきあげ(掻き揚ぐ) > かかぐ」「さしあげ(差し上ぐ) > ささぐ」のような母音脱落の例は 中古中世の文献ばかりでなく、現代においても用いられる動詞である。「持ち上ぐ(下二段動詞. 現代語では「もちあげる(下二段動詞)」)」も母音脱落によってできた語形であるが、現代日本語では「もちあげる」と「もたげる」が共存している。ところが最近、「もたげる」が、本来の「持ち上げる」の意味でなく、「うつむく」の意味で用いられる傾向がある。このようなものを単なる誤用とみなす立場もあるが、もし誤用なら、なぜそのような現象が起こるのかについて考えてみる必要があると思われる。

一般に語形に変化が生じた場合、本来の語形と変化された語形はある期間、共存・併存するが、後に元の語形が変化形に吸収される場合(1)もあれば、変化形が元の語形に戻る場合(2)もある。さらに、両方が意味を分かち合うことで共存する場合(3)もある。

- (1) a. 五段動詞における音便形「書いて」「読んで」「立って」
b. 助動詞「まじ > まい」
c. 「ナガイキ(長息) > ナゲキ(嘆き)」「フミイタ(文板) > フムダ > フダ(札)」
- (2) a. 五段動詞における音便形「話いて > 話して」
b. べしき > べしい > べし(現代では「べき」のみ)
c. 「イヒズテ > 言い捨て(言い捨て)」「シホバマ > シオハマ(塩浜)」
- (3) a. 「差し上げる」: 「与える・やる」の謙讓語
「捧げる」: 献上する、尽くす
b. 「かきあげる」: (髪などを) 引き上げる
「かかげる」: (高い所へ) 上げる、(目立つところに) 載せる・示す
c. 「持ち上げる」: 物を上の方へ上げる。頭などを上の方へ起こす(もたげる)。
ほめておだて上げる。
「もたげる」: もちあげる。おこす。増す

このうち、本発表では(3)のように、語形変化によって意味の転換が起こったり、意味の縮小される用例を中心に考察してみる。

2. 語形変化による語彙の意味変化

田中章夫(1978:282-284)は、語彙の変化する要因について「語形の変化」と「語義の変化」に大別し、(4)のように細分類している。

(4) 語形の変化

- 音のみの変化: 音の脱落・音の交替・音の融合・音質の変化・音の転倒
- 意味・文法と関連のある変化: 語源意識から・文法変化に伴って・同音衝突によって語義の変化
- 意味の幅の変化: 意味の拡大・意味の縮小・意味の分化
- 意味の価値の変化: 意味の下落・意味の向上
- 意味の転換: 比喩的転換・対義的転換・連鎖的転換

本発表で注目するのは、ある理由で語形に変化が生じた語において、元の語形と変化語形の間で語義の変化が見られる場合である。紙面の関係上、「モタゲル」の例を中心に考察する。

田中(1978: 282-284)の分類に従えば、「モタゲル」の場合、辞書的な意味としては「モチアゲル」とほぼ同じ意味で用いられるが、主に「頭などを上の方へ起こす」という意味で用いられる場合が多いことから、意味の幅が縮小したケースといえることができる。ところが、Web上では(5)のような例が見られる。

- (5) a. お客様の声：今年もなんとか園の4つのバケツ稲は頭をもたげています。こどもたちは「お米だー」と嬉しそうに網越しに触っていました。本当にありがとうございました。 2017/09/25 (<https://yoojie.exblog.jp/27151577/>)
- b. いつもは真っ直ぐ立ったままのパインも、大きくなれば時に頭をもたげるがあります。その姿はまるで“たわわに実った稲穂”のようで、謙虚さを感じます。 2015「パイラント新聞」夏第7号(file:///C:/Users/user/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/J91EVUTU/NS7.pdf)
- c. もしもあなたがいなくなったら私はどうなってしまうだろう？持ち上がらない位に首をもたげて泣くのかな 2005 和田アキ子歌『三国駅』から (https://kappagas.wordpress.com/2005/05/01/_00a8/)
- d. 首を伸ばした時の高さが約7メートル60センチに及ぶわが国最大のからくり人形のついた山車です。(中略)演技時には銅鑼(どら)と太鼓のリズムに合わせて首を長く伸ばし、首をもたげて舌を伸ばして目を剥き、両手を前後に大きく振ります。 2017/04/01 県指定有形民俗文化財、大入道山車) (<https://www.city.yokkaichi.lg.jp/www/contents/1001000002659/index.html>)
- e. 以前ご紹介したヒマワリは、首をもたげて枯れていましたが、たくさんの種を付けていました。 2019/09/04(神戸市立東垂水小学校5年生理科「花から実へ」 (<http://www2.kobe-c.ed.jp/htr-es/index.php?key=jozkac8ng-111>))

(5)a-(5)c は個人のブログや広告、歌詞などから採った用例であり、(5)d, e は自治体や学校など、公式機関のホームページなどから採ったものである。

権景愛(2021)では、母音脱落による「モタグ(<モチアグ)」の用例を中古から現代までの意味用法について検討考察し、以下のような傾向を確認した。すなわち、近世までの「モチアゲル」「モタゲル」の用例は単純に「身体(の一部)や事物を持ち上げる」の意味として用いられたものが多く、近代になって「ある物事が発生する」「相手を褒めたりおだてる」などの意で使われる例が見られる。

- (6) a. 事業界も是に於てか今日の悲境を脱却して、漸次頭を擡たげ來たるとともに、輸出貿易を益々奨励するにいたるべきを疑はざるなり。(60M 太陽 1901_04013)
- b. 菅公の神徳をたたへむとして、歴史上の事実によりて、菅公を大政治家ともちあげ、藤原氏が帝室を犯すに至らざりしは…(60M 太陽 1901_04014)
- c. 則ち故高山博士が美的生活論を唱へ、登張竹風氏がニツチエを擡ぎ、大學生の執筆に成れる雑誌『|帝國文學』がイブセン、トルストイの信者に依りて成りたる文字を掲げ…(60M 太陽 1909_06007)

一方、現代日本語「モタゲル」の場合は、ほとんどが身体部位(頭、首など)との連語形式(collocation)を作る場合に局限される反面、「モチアゲル」は様々な名詞との結びつ

きを許容しており、本来の意味に近い「[人/動植物]が [身体部位]を～」型より「[人/動植物]が [物・事]を～」型のほうが多く現れる傾向がある。「現代日本語書き言葉均衡コーパス」による用例検索結果をまとめると、《表 1》《表 2》のようになる。

《表 1》

		[頭部]及び[頭部以外の身体]を	[物/事]を	[心]を	[\emptyset]を
モ タ ゲ ル 216	[人/動植物]が 95	[人/動植物]が[頭部]87を [人]が[頭部以外]4を	[人]が[物/事]3を [人の身体]が[物/]2を		
	[物/事]が 23	[物/事]が[頭部]20を			
	[心]が 98	[心]94が[頭部(頭、首、鎌首、顔)]を	[物(トマ機)]が機首を		[心(チャレンジ精神, 不安, 好奇心)]3が

《表 2》

モ チ ア ゲ ル 829	[人/動植物]が 780	[人/動植物]が[頭部]65を [人/動物]が[頭部以外]154を [人]が[人/動物]81を	[人/動物]が[物]478を	[人]が[心]5を	[人]が(髪)1を
	[事物]が 42	[物/事(方法, 宗教など)]4が [頭部]を [物/事]が[頭部以外]2を [物/事]15が[人]を	[物/事]が[物(船, エンジン, 弾)/事(老人問題など)]21を		
	[心]が 7	[心(自尊心, 確信, 根性, 不信, 考えなど)]6が頭を		[心(喜び)]1 が[心(意識の芽)]を	

《表 1》《表 2》により、主に身体的な動作を描写していた「モチアゲル」「モタゲル」が抽象的、心理的な物事を描写するまで意味が拡大する一方で、共存していた「モチアゲル」が表現する連語形式が増えるにつれて口語体において「モタゲル」の使用がだんだん減っていき、「モタゲル」の持っていた本来の意味が忘れ去られ、これが意味の逆転にまで及んだものと考えられる。ただ、本来の意味が忘れられることが、なぜ意味の逆転を引き起こすのかについては、まだ解決できておらず、本発表の目的にもなっている。

3. 語彙の意味が本来の意味から逆転する場合

田中(1978:284)は「対義的転換」の例として次のような例を挙げている。

- (8) a. 笑止(気の毒 → 笑うべきこと・おかしいこと)
- b. 果報(因果のむくい → よいむくい・しあわせ)

「モタゲル」が本来の「(頭などを)持ち上げる」の意から転じて「(頭などを)うなだれる・下げる・うつむく」の意として用いられるのは田中(1978)の「対義的転換」に相当するものと考えられる。

平成 14 年(2002)年度に実施された『国語に関する世論調査』の報告書によると、(8)のような意味が逆転する例として「役不足」「確信犯」「流れに棹さす」などの語彙が挙げられている。

- (9) a. 役不足：本人の力量に対して役目が軽すぎる(27.6%)〈本来の意味〉 ⇔ 本人の力量に対して役目が重すぎる(62.8%)
 b. 確信犯：政治的・宗教的等の信念に基づいて正しいと信じてなされる行為・犯罪又はその行為を行う人(16.4%)〈本来の意味〉 ⇔ 悪いことであると分かっているがなされる行為・犯罪又はその行為を行う人(57.6%)
 c. 流れに棹さず：傾向に乗って、ある事柄の勢いを増すような行為をすること(12.4%)〈本来の意味〉 ⇔ 傾向に逆らつてある事柄の勢いを失わせるような行為をすること(63.6%)
- (10) a. 煮詰まる：結論の出る状態になること(56.7%)〈本来の意味〉 ⇔ 結論が出せない状態になること(37.3%)
 b. 雨模様：雨が降りそうな様子(43.3%)〈本来の意味〉 ⇔ 小雨が降ったりやんだりしている様子(47.5%)

平成19年(2007)度『国語に関する世論調査』においても「無然」や「姑息」など、本来の意味とは異なる意味で理解している日本人が多いという調査報告がある。

- (11) a. 無然：失望してぼんやりしている様子(16.1%)〈本来の意味〉
 腹を立てている様子(69.4%)
 b. 姑息：「一時しのぎ」という意味(12.5%)〈本来の意味〉
 「ひきょうな」という意味(69.8%)

このように本来の意味が逆転したり、別の意味で用いられるのは珍しいことではなく、このような傾向こそ、日本語が絶えず変化しているということを示すものと解釈できる。ただ、新野直哉(2011:11)は「現代日本語において進行中の変化に対する研究の一つとして「誤用」及び「気づかない変化」について考察しているが、果たして「誤用とみなしてよいものなのだろうか。一方、橋本行洋(2005:108)はこのような変化が生じる要因に関する考察が「新語研究において重要な課題の一つ」であると指摘している。

「モタゲル」に見られる意味の転換は、語形変化によって作られた語形が元の語形と併存する形で長い間用いられてきたが、元の語形の頻繁な使用と連語形式の拡大などにより、脱落形の用いられる頻度が少なくなった。それがきっかけとなって「モタゲル」の本来の意味が忘れ去られることとなったと思われる。そのあと、「頭など」との連語が固定化し、連想作用によって「新たな意味が付与」され、新語として現代日本語として位置づけられたのではないだろうか。

4. おわりに

【参考文献】

- 新野直哉(2011)『現代日本語における進行中の変化の研究 - 「誤用」「気づかない変化」を中心に-』ひつじ書房, pp.1-416
 新野直哉(2020)『近現代日本語の「誤用」と言語規範意識の研究』ひつじ研究叢書, pp.1-288
 田中章夫(1978)『国語語彙論』明治書院, pp.282-284
 權景愛(2021)「일본어「모타げる」의 의미 변화 고찰- 단어 형성 과정과 오용 표현을 중심으로- (日本語「もたげる」の意味変化考察—語形成過程と誤用表現を中心に—)」『日語日文学』大韓日語日文学会, 89, pp.261-277